

Title	継続的改善活動促進要因に関する研究
Sub Title	A study on factors to promote continuous kaizen activities
Author	河野, 宏和(Kono, Hirokazu)
Publisher	慶應義塾大学
Publication year	2021
Jtitle	学事振興資金研究成果実績報告書 (2020.)
JaLC DOI	
Abstract	<p>新型コロナ感染症により、企業への訪問調査が困難となつたため、改善活動継続に関する理論的考察を中心に研究を行つた。</p> <p>第1のテーマは、改善活動と企業業績との関連に関する研究である。財務会計の領域において、企業の売上高が増える場合の原価の上昇に比べて、売上高が減少する場合の、原価の減少率が小さくなることが、原価の下方硬直性として指摘されている。多数の企業を対象に実証研究で確認されているその概念を、単一企業での改善活動と企業業績の対応に適用し、長期に渡る改善活動の継続が、製造原価や販売管理費にどのように反映されるかを分析した。その結果、売上高が減少していく局面では、人員削減、設備など固定資産、研究開発、売上増加への準備といった要因により、原価の減少率が抑制されることが確認された。その一方で、一度そうした下方硬直性が生じると、その原価構成を変えることは難しくなるため、原価率の高い状態が継続され、改善活動に加えて売上拡大努力が必要となることが確認された。こうした成果は日本経営工学会2021年春季大会において発表を予定している。</p> <p>第2のテーマは、改善に必要な資金調達と返済に関するものである。資金を外部から調達した場合、返済方法として、元利均等、元本均等、元金据え置きなどの方法が知られているが、金利負担の違いについて理論的な考察はこれまで展開されていない。そこで、様々な返済方法の経済的な有利さを理論的に明らかにした。併せて、借入資金で購入、設備の償却方式と借入金の返済方法の対応から生じる企業業績の変化について考察した。その成果は日本経営工学会2020年秋季大会にて報告されている。</p> <p>これらその他に、研究者がこれまで蓄積してきた改善活動に関する知見をベースに、新たな企業調査の内容を加えて、添付の発表および公刊を実施・計画している。</p> <p>Theoretical research was developed in place of planned field work due to pandemic situations. The first topic is relevant to cost stickiness for corporate accounting. The concept is applied to a corporate analysis in place of empirical analysis, to evaluate effect of long-term continuous kaizen activities. Cost stickiness was confirmed due to such factors of fixed asset, salary and expenses, research and development. Once a cost stickiness is observed, cost structure is changed and corrective actions to increase sales to better set it off are required. This outcome will be presented at the 2021 Annual Spring Meeting of JIMA (Japan Industrial Management Association).</p> <p>The second topic is on the evaluation of payback for the loan of corporate activities. Difference in the burden in total amount is evaluated for multiple payback strategies, and the relationship of it with the depreciation in book value of fixed asset for corporate financial outcome, is investigated. This result was presented in the 2020 Annual Autumn Meeting of JIMA.</p> <p>In addition, research outcomes were published as listed based on past accumulation and corporate analysis.</p>
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=2020000008-20200014

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

研究代表者	所属	大学院経営管理研究科	職名	教授	補助額	300 (A) 千円
	氏名	河野 宏和	氏名（英語）	Hirokazu Kono		

研究課題（日本語）

継続的改善活動促進要因に関する研究

研究課題（英訳）

A Study on Factors to Promote Continuous Kaizen Activities

1. 研究成果実績の概要

新型コロナ感染症により、企業への訪問調査が困難となつたため、改善活動継続に関する理論的考察を中心に行なった。第1のテーマは、改善活動と企業業績との関連に関する研究である。財務会計の領域において、企業の売上高が増える場合の原価の上昇に比べて、売上高が減少する場合の、原価の減少率が小さくなることが、原価の下方硬直性として指摘されている。多数の企業を対象に実証研究で確認されているその概念を、単一企業での改善活動と企業業績の対応に適用し、長期に渡る改善活動の継続が、製造原価や販売管理費にどのように反映されるかを分析した。その結果、売上高が減少していく局面では、人員削減、設備など固定資産、研究開発、売上増加への準備といった要因により、原価の減少率が抑制されることが確認された。その一方で、一度そうした下方硬直性が生じると、その原価構成を変えることは難しくなるため、原価率の高い状態が継続され、改善活動に加えて売上拡大努力が必要となることが確認された。こうした成果は日本経営工学会2021年春季大会において発表を予定している。

第2のテーマは、改善に必要な資金調達と返済に関するものである。資金を外部から調達した場合、返済方法として、元利均等、元本均等、元金据え置きなどの方法が知られているが、金利負担の違いについて理論的な考察はこれまで展開されていない。そこで、様々な返済方法の経済的な有利さを理論的に明らかにした。併せて、借入資金で購入、設備の償却方式と借入金の返済方法の対応から生じる企業業績の変化について考察した。その成果は日本経営工学会2020年秋季大会にて報告されている。

これらの他に、研究者がこれまで蓄積してきた改善活動に関する知見をベースに、新たな企業調査の内容を加えて、添付の発表および公刊を実施・計画している。

2. 研究成果実績の概要（英訳）

Theoretical research was developed in place of planned field work due to pandemic situations.

The first topic is relevant to cost stickiness for corporate accounting. The concept is applied to a corporate analysis in place of empirical analysis, to evaluate effect of long-term continuous kaizen activities. Cost stickiness was confirmed due to such factors of fixed asset, salary and expenses, research and development. Once a cost stickiness is observed, cost structure is changed and corrective actions to increase sales to better set it off are required. This outcome will be presented at the 2021 Annual Spring Meeting of JIMA (Japan Industrial Management Association).

The second topic is on the evaluation of payback for the loan of corporate activities. Difference in the burden in total amount is evaluated for multiple payback strategies, and the relation ship of it with the depreciation in book value of fixed asset for corporate financial outcome, is investigated. This result was presented in the 2020 Annual Autumn Meeting of JIMA.

In addition, research outcomes were published as listed based on past accumulation and corporate analysis.

3. 本研究課題に関する発表

発表者氏名 (著者・講演者)	発表課題名 (著書名・演題)	発表学術誌名 (著書発行所・講演学会)	学術誌発行年月 (著書発行年月・講演年月)
河野 宏和	継続的改善の意義を再考する	IE レビュー誌	2020年5月
河野 宏和	借入資金の返済方法の経済性評価	日本経営工学会 2020年秋季大会	2020年10月
山口 淳、服部 学、横川正昌、河野宏和	改善活動継続事例の特徴抽出のための問い合わせリストの提案 一化粧品製造 E 社の改善活動件名の事例研究—	経営情報学会 2020年全国研究発表大会	2020年11月
河野宏和、キム ソンヒョン	改善活動による経営成果の下方硬直性について	日本経営工学会 2021年春季大会	2021年5月(予定)